政務活動調査報告書

調査日	平成３０年５月９日（水）
視察場所	北海道　旭川市
調査項目	北彩都あさひかわ整備事業について
視察者名	畑尻宣長　野島さつき
市の概要	面積：747.66 ㎢　　人口：339,605 人　　人口密度：406.77 人/㎢ 世帯：177,489 世帯　経常収支比率：92.3%　実質公債費比率：7.1%

＜「北彩都あさひかわ」の整備計画＞

（１）新しい都市機能の導入

「北彩都あさひかわ」地区では、テーマゾーン「北の生活文化産業の創造」街区の形成・行政拠点施設整備街区の形成をはじめ、旭川発展のための新しい都市機能を導入する。これらの街区では、敷地内の緑化を進めるとともに、街区内を自由に散策できるまちづくりを進める。

（２）川と市街地との融合

忠別川沿いに面する地区特性を活かし、川と融合する市街地空間の形成を目指す。

（３）大規模な緑地空間の整備

忠別川沿いに市民が自然と親しみ、自然の大切さを実感できる大規模な緑地空間を整備する。

（４）快適な住宅市街地の形成

地区東側には、北国の生活に適した、快適な住宅街を形成していく。

（５）既成都心部と連続した市街地の形成

鉄道北側の地区では、都市型の住居・業務・商業などが立地する既成の都心部と連続する市街地を作る。

（６）緑豊かな駅前広場の整備

鉄道の高架によりつくられる旭川駅には、広い駅前広場を確保し、また、緑化を進めることにより、川から駅、買物公園などの既成都心部へとつながる緑豊かな空間を形

成していく。

（７）水と親しめる大池の整備

駅に隣接する河川の空間には、大きな水面を持つ池を造り、人々が水と親しめる場とする。

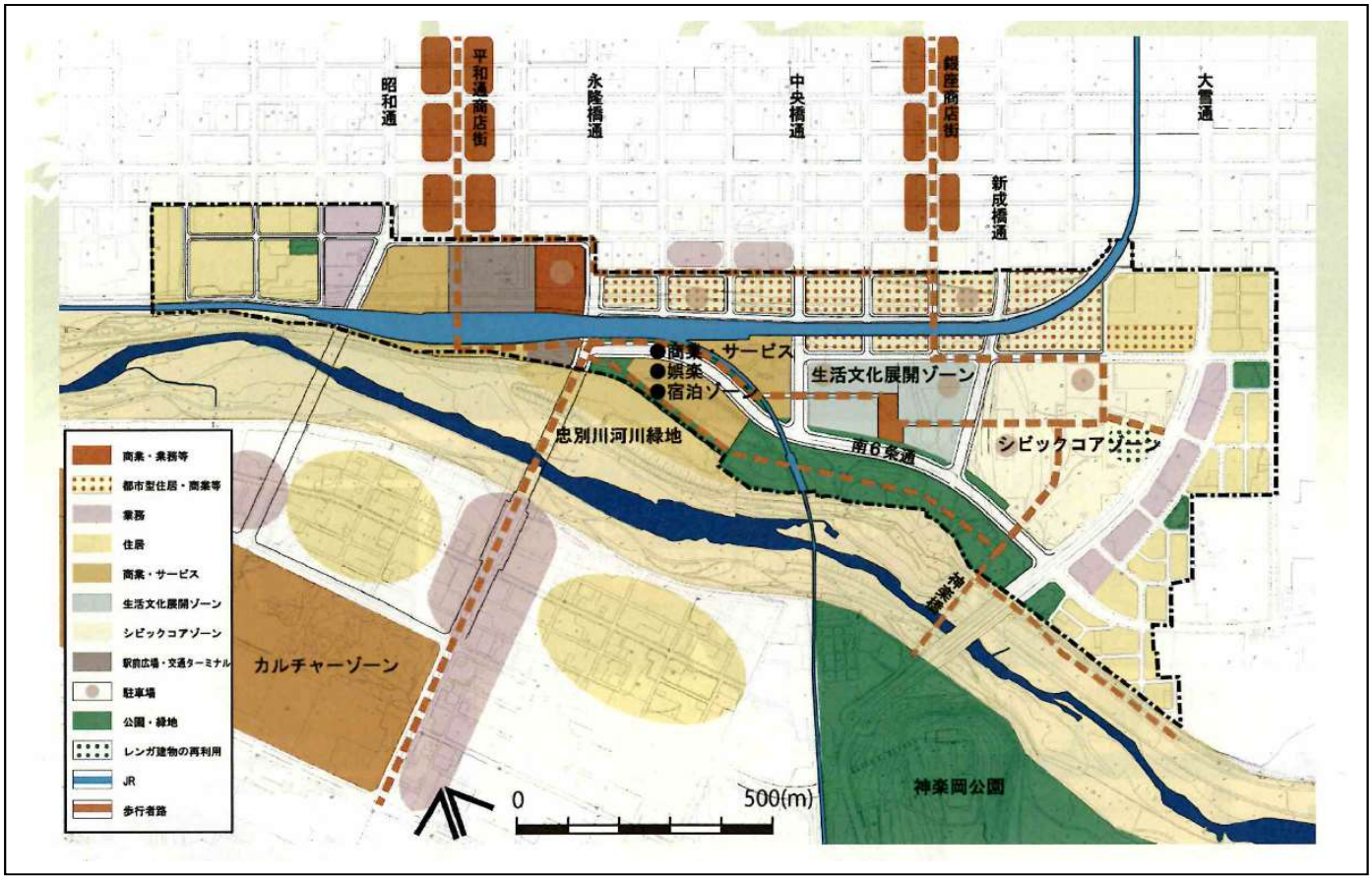
（８）川の空間を市街地に引き込むための沿道緑化

川の空間と一体的な市街地を形成していくため、南６条通、新成橋通、中央橋通などの沿道では、道路沿いに十分なボリュームのある緑化を図る。

（９）街並みをつくる建築物の配置

建築物の配置にあたっては、壁面の位置や色彩など。良好な街並み景観の形成に配慮する。

＜北彩都あさひかわの土地利用計画図＞



＜北彩都あさひかわの歩み・年表＞

西暦（年）	平成（年）	事　業　の　内　容
１９９０	2	旭川周辺開発整備計画の検討開始
１９９２	4	都市拠点総合整備事業調査（平成４年～5 年）
１９９３	5	旭川駅周辺開発整備計画書とりまとめ

１９９６	８	都市計画の決定（鉄道高架・区画整理・関連街路など） 土地区画整理事業に着手 北彩都あさひかわ開発促進期成会設立
１９９７	９	「北彩都あさひかわ」愛称決定
１９９８	１０	鉄道高架事業に着手
２００２	１４	旭川市障がい者福祉センター「おぴった」の完成
２００３	１５	新神楽橋の開通 JR 旭川運転所の完成
２００５	１７	旭川市科学館「サイパル」の完成
２００７	１９	神楽橋（歩行者橋）の改修完了
２００８	２０	旭川地方合同庁舎の完成 「旭川駅に名前を刻むプロジェクト」の実施
２０１０	２２	鉄道高架の開通 市民活動交流センター「CoCoDe」の完成
２０１１	２３	旭川駅のグランドオープン 氷点橋の開通
２０１３	２５	クリスタル橋の開通 「あさひかわ北彩都ガーデン」のプレオープン（駅南地区）
２０１４	２６	駅前広場の全面供用開始 土地区画整理工事の完了
２０１５	２７	「あさひかわ北彩都ガーデン」のグランドオープン 大池の湛水

＜各種調査検討委員会＞

『北彩都あさひかわ』整備は、区画整理、鉄道高架、河川空間整備、橋梁整備、シビックコア地区整備などが輻輳し、また、関係機関も、国、北海道、旭川市など複数に及び、事業期間も長期にわたることから、当初の基本コンセプトを継続して実現するための組織作りが不可欠であった。

『北彩都あさひかわ』では、各部会での検討内容を「まちづくり推進会議（旧：まちづくり検討会）」という総合的な協議の場に持ち寄り、相互に連絡調整しながら事業を進められました。

参加者（1995 年当時）

アドバイザー　東京大学工学部教授　篠原修：内藤廣建築設計事務所　内藤廣
北海道大学工学部教授　小林英嗣：東海大学芸術工学部教授　大矢二郎
東海大学芸術工学部教授　大野仰一：北星学園大学教授　辻井達一

コーディネーター　株式会社日本都市総合研究所　加藤源、高見公雄、三牧浩也

関係機関　北海道開発局：北海道：JR 北海道：旭川市

各種検討委員会

まちづくり検討会（1995 年～1998 年）

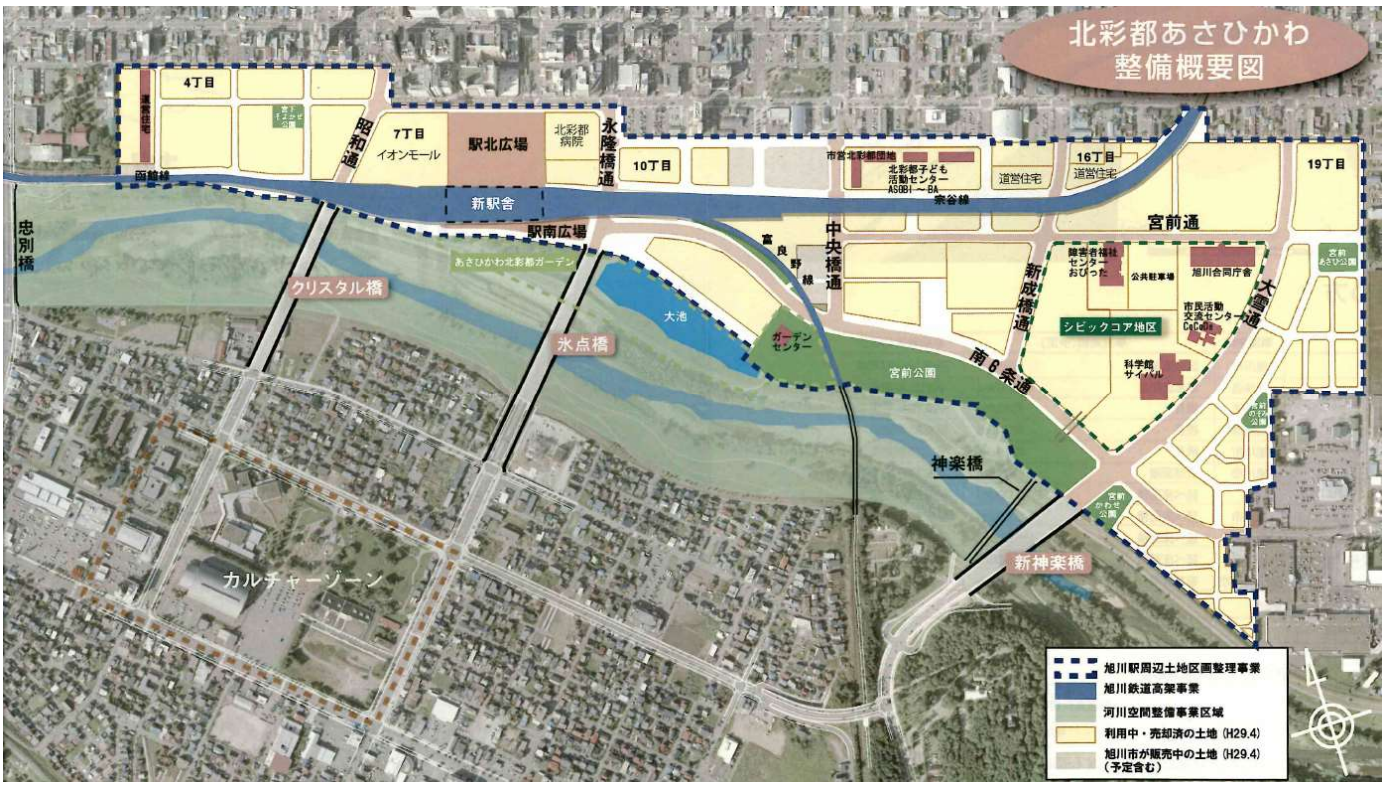
北彩都あさひかわまちづくり推進会議（2000 年～2014 年）

街並み形成協議会／旭川シビックコア地区整備推進協議会／旭川高架推進協議会／昭和橋・新永隆橋検討会議／市民参加組織

旭川駅周辺整備協議会／都市計画行政部会

期成会・・旭川駅周辺開発促進期成会／旭川駅周辺開発地元促進期成会

＜北彩都あさひかわ整備概要図＞



＜土地区画整理事業＞

駅周辺に広がる旧国鉄用地を有効活用し、都心機能の充実・強化を図るとともに、河川空間などの自然と調和した市街地を形成することを目的として、宅地整備や公園、道路の整備を行いました。

（１）事業の名称　　旭川駅周辺土地区画整理事業

（２）事業主体　　旭川市

（３）面積　　８６．２ヘクタール

（４）事業機関　　平成８年度～平成３１年度

（５）事業費　　約２１０億円

（６）概要　　都市計画道路８路線、地区公園１カ所（約５．４ヘクタール）
街区公園４カ所、駅前広場（約２．２ヘクタール）の整備
減歩率　４３．４％

1996年（平成８年）

2013年（平成25年）

＜鉄道高架事業＞

＜橋梁整備事業＞

＜河川空間整備＞

＜北彩都あさひかわの主な受賞歴＞

『北彩都あさひかわ』の総合的なまちづくりへの取組が評価され，関係団体の賞を受賞している。

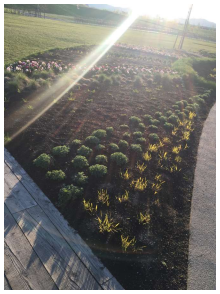
H27・3 北海道赤レンガ建築賞

H27・5 日本都市計画学会計画設計賞

H28・1 土木学会デザイン賞最優秀賞

H27・6 都市景観大賞「都市空間部門」大賞

＜あさひかわ北彩都ガーデン＞



＜所　感＞・・・畑尻宣長

旭川市の北彩都あさひかわ整備事業について学んできました。これは、本市が進めている乙川リバーフロント地区整備事業より先に、国のまちづくり交付金を活用し行った事業です。旭川市の整備事業が完成し、その後、どのような活用がなされているのか、本市にとって参考になるのではないかと思い伺いました。整備事業は、平成 2 年から検討が開始されています。区画整理が決着つくまでと考えると、約 30 年の歳月が掛かっています。駅前広場、川まちづくりによる区画整理、シビックコア地区整備、駅舎の高架事業に橋梁の整備と盛りだくさんの整備事業です。ここで、気になったことは、検討を始めて様々な事業が絡み合い、年月がかかることが想定される中、なぜ、途中で見直しや、中止がなされなかったのか。もちろん首長も変わっていました。それは、当初から、まちづくり検討会（1995 年～1998 年）、その後、北彩都あさひかわまちづくり推進会議（2000 年～2014 年）がすべての各種調査検討委員会の内容を総合的に判断する場となり、調整を行ってきたからであります。ですので、時間が掛かったり、各委員会が立ち上がっても、ぶれることなく当初の構想通りに進められてきたということでした。本市においても、この乙川リバーフロント地区整備事業も進んできましたが、首長が替わると計画途中であっても進まない可能性が出てくのではないかと危惧するところです。

もう一点は、完成後の利用についてです。北彩都あさひかわは、あさひかわ北彩都ガーデンを活用しています。市民が育てるパブリックガーデンとして、サポーター（ボランティア）が 70 名在籍し花壇などの手入れを行っています。花の季節になると、見学ツアーなどが開催されます。夕方、川べりや、ガーデン付近を散策しましたが、ちらほらと散歩されている人を見受けました。また、高校生たちが、ガーデンから駅舎の周りにたくさんいる光景も目にしました。市民が憩いを感じることが出来るスペースは非常に重要だと思います。そういう意味では、活用されているのではないかと思いました。特徴的なものは、冬になると、駅南の広場を利用し、スノーボートを 1 回、1 人 200 円で乗れるイベントを行ったり、駅前広場では、スケートリンク場を作ってしまったりと活用されています。スケートリンクは無料で、貸しスケート靴まで無料ということでした。市民のみならず、観光客にも楽しんでもらえたイベントとなり、中心市街地の活性化にも繋がったということでした。

今後の課題は、整備事業は国の補助が頼りの部分もあり、ハード整備による人の流れもあった。それがひと段落し、いよいよ自力で冬のスキーなどの観光にどのように結び付け、呼び込んでいけるかということです。やはりそこは、民間の力がどうしても必要になってくると実感しています。本市としても、その為の施策を充実させなくてはならないと考えさせら

れました。いかに本市の特色を活かしたまちづくりを行い、そこに住む市民が潤う施策の充実をさらに考えていきます。

＜所　感＞・・・野島さつき

旭川駅に着いてまず驚いたのは、イベント広場かと思うほどの駅舎の広さです。地元の木材をふんだんに使った温かみのある内装。駅構内には「旭川観光物産情報センター」があり、観光案内カウンターでは外国語対応もなされており、地場産品の展示販売コーナーや道産食材を使用した飲食コーナーがあります。彫刻美術館ステーションギャラリーや、駅直結で「イオンモール」があることも驚きでした。そして、駅の南側に広がる忠別川を活かした広々としたガーデンと、どこまで続いているのか歩いて見たくなる遊歩道と彼方に大雪山連邦を望む自然豊かな景色。送迎の車を待つ人の他、ダンスの練習をしている高校生、犬の散歩を楽しむ人、散歩をしている親子連れ等、駅利用者だけではなく、地域のオアシスとして水辺空間が利用されている風景が広がっていました。

「北彩都あさひかわ」整備計画は、平成２年の計画策定から 25 年かけて旭川市、国、北海道、ＪＲが連携し整備を進めてきました。郊外型商業施設等の出店や駅前老舗百貨店の閉店等中心部の都市機能の低下、鉄道と川による市の南北交通の分断、国の出先機関の老朽化と統廃合、国鉄の分割民営化により広大な土地が生まれる等、計画的な開発によって様々なまちの課題を解決するための調査・検討が進められるようになりました。区画整備、鉄道高架、河川空間整備、橋梁整備、シビックコア地区整備などが輻輳し、事業期間も長期にわたることから、当初の基本コンセプトを継続して実現するための組織づくりが不可欠であり、アドバイザーやコーディネーターを配置した「まちづくり推進会議」を立ち上げ、相互に連絡調整しながら事業が進められました。

「土地区画整理事業」では、市が事業主体となり旧国鉄用地を有効活用し、宅地整備や公園、道路の整備を行いました。

「鉄道高架事業」では、北海道が事業主体となり、土地区画整理事業と一体で施行することで、これまで鉄道や河川により分断されていた都心地区とカルチャーゾーンである南部地区との一帯化を可能にしました。

「橋梁整備事業」では、円滑な都心の交通の確保や既存の都心部と隣接する南部地区との一帯化を目的に、３本の橋を整備しました。また、今まで使っていた橋は、南北の公園を結ぶ歩行者橋として保存活用しています。

「河川空間整備」は、北海道開発局と市が事業主体となり、忠別川の自然環境を維持しながら、階段状の護岸整備や、穏やかな水面の大池（人口池）の整備をしました。

「シビックコア地区」は、北彩都あさひかわの東側に位置する約 10ha の地区に行政機能を集積し、国の合同庁舎、障害者福祉センター、科学館、市民活動交流センター等の施設を整備し、街区の中央にはオープンスペースを設け、野外コンサートや屋外カフェテラスなど、多様な活動を誘発する空間を形成しています。

「あさひかわ北彩都ガーデン」は、旭川駅に隣接した空間でありながら豊かな自然が広がるすばらしい環境を活かし、市民が育てるパブリックガーデンとして、サポーターが花壇の手入れなどを行っています。

平成 27 年でハード整備はほぼ完成し、線路の高架や橋が３本になったことで交通渋滞は緩和され、南北の行き来もし易くなり、歩く人も増えたといいます。中心市街地に如何に人を惹きつけるかが大きな課題でしたが、駅前には民間のマンションや市営住宅、道営住宅が建設され、まちなか居住人口が増加してきました。また、郊外型商業施設として発展してきた「イオンモール」が、高齢化社会を意識し駅直結型店舗を旭川駅で試験的に展開したことも功を奏し、バスを利用した高齢者の居場所づくりに役立っているようです。冬季には、外気がマイナス 40℃になることを利用して、天然のスケートリンクや大池でのスノーモービル体験などで賑わいを創出しています。今回の事業にあたっては、平成４年から市民説明会を年間 25～37 回、計 500 回開催し、シンポジウムやアンケート調査など、市民に理解を求めながら推進し、北彩都ガーデンでのボランティアサポーターへと繋がっています。整備されたことで、人の流れが生まれ、まちが活性化されることが重要です。いま、本市においても「乙川リバーサイド地区整備事業」が進んでいますが、ハードが整った後、如何に人の流れをつくっていけるかが肝心です。「ＱＵＲＵＷＡ戦略」の周知を兼ねたイベントやアンケート調査など多くの市民を巻き込んで盛り上がりの中で供用開始を迎えられる仕組みづくりの必要性を感じます。

以上